

タイの東北地域と北部山岳地域への旅
- 第二回タイ・スタディーツアーに参加して

辻 宏

本年 2004 年 1 月 11 日から 20 日までの間、タイスタディーツアーに参加した折の記録である。このツアーは日本基督教団西東京教区がタイ国のキリスト教会との協力関係を模索して計画したプロジェクトで、今回はその第 2 回目で、参加メンバー 16 名であった。

今回の最初の訪問地は、東北部(イサーン)のウドンタニ。目的地に着く前に、メコンを隔ててラオスと向かい合う国境の町ノンカイへ向かった。途中、案内を受けて蘭園を訪ねた。歌声に反応して揺れ動く珍しい新品種の "dancing plant" を栽培しており、あちこちに散ったメンバーが、反応を確かめようと、一所懸命、歌い且つ語りかけている様子は傑作だった。



(歌いかけると反応する dancing plant)

さてタイキリスト教団ウドンタニ地区の教区長アムヌアイ牧師夫妻には、昨夏、武蔵野扶桑教会の礼拝でお会いしている。アムヌアイ牧師の教会はウドンタニの町から 1 時間半ほどの奥の農村、160 戸、500 人の村にある。仏教国のしかも寺院の相対的に多いこの地域に村ごとキリスト教であるというのが極めて珍しい。一族の叔父さんが米国留学時にキリスト教徒になり、帰国後村中が感化を受け、50 年ほどの歴史の中で、村中がキリスト教徒になった。教会学校は日曜日以外にも開かれ、近隣の村からも子供達が集まり、平生は 250 人ほどだが、クリスマスになると 600 人も集まる。教会の会堂は現在建築中で、教会員らが自らの労働力によって森から石(火山岩)を切り出し、地盤や壁を作ってきて、40%まで進んでいる。1 階だけは出来上がっているの礼拝に支障は無い。

以前日本に留学した経験を持つ牧師の長女のティックさんが、日が暮れないうちにと一行を村中案内してくれた。歩いて行く沿道の家ごとに、また途中会う人ごとに我々を紹介してくれるので、村中の男や女、年配者から子供たちまで、楽しく心を通わせ合うことが出来た。夜の催しは、本来一昨日であった子供の日の予定を今日に繰り下げ合わせてくれた模様。この地域一帯は広大な農地で、日が落ちると、ここだけが光と音楽の集約されている場所となり、集まった 300 人程の少年少女達は催しを心から楽しみ、ゲームに興じ、また壇上で歌やタイダンスを披露していた。宴たけなわとなった頃、我々もステージ上に招かれ、催しに加えてもらった礼と当地を訪れた目的を述べ、一人一人が自己紹介をした上、メンバーのオカリナ伴奏で讃美の歌を歌った。

集いが終わって、一行 14 名は、2 人ずつに分かれ、個人のお宅に宿泊することになった。私達が泊めていただいたお宅は中年夫婦の家庭であった。もてなしに水を浴びさせてくれ、顔を洗ってから腰をすえ、ご主人の仕事、農業の状況、そのご家庭の状況、バンコクでコンピューターの仕事をしている子供さんたちの話などを聞き、ひとしきり会話を交わした。そして微かに香料がかけられ丁寧に用意していただいた寝床でタイでの最初の夜の寝についた。



(宿泊したお宅の夫婦、後方の軒下には乾期に備え、天水を貯めておく甕が見える)

けたたましく庭先の鶏が鳴き、バタバタと飛び回ったかと思うと村中の鶏が鳴き始める。真っ暗な中で時計を見ると未だ4時ころ。しばらくして鳴き声も一段落し、鳴き声が遠く近くで交わされ、再び静まったところで、心地よく寝直しをした。

翌朝はご主人が村の中を案内してくれた。夕べと違って、朝は学校へ行くためにピックアップトラックを待つ子供や、単車に乗って勤めに出る若者、大工道具を担いで塀を修理しに行くという年寄りなど、朝の活気がゆったりと戻っていた。朝食を教会の長老さん達と一緒にし、共に "Amazing Grace" を讃美し、礼拝を守った後、大勢の人たちに見送られ、ウドンタニを去った。



二日目以降の行程は、ウドンタニからコンケン(ハンセン病コロニー)、ピサヌローク(泊)、スコタイ(世界遺産の遺跡、泊)、チェンマイまでバスで移動し、その後、チェンマイからヴァン、小型トラックによりカレンの部落までを往復する全行程は 1500km に達し、かなりタフなものであった。

(スィーサチャナライのワット・チャンロム)

次に訪れたのは、北部(パヤップ)のカレンの部落。昨年はチェンマイに極く近い村であったが、今回はチェンマイの西南 250km の山岳地方、ヴァンに乗って5時間ほどの山奥にある、ティワタ村。そこには素晴らしく立派な公立の小学校、中学校があるが、ティワタ村近郷に住む子供は兎も角も、更に奥地のカレン部落の子供たちには通学が不可能である。子供たちは、親から離れて、村に出来た寄宿舎に入り、学校に通う。ダウ牧師の牧するフエイ・ナム・カオ教会が運営する。小学1年生の子から中学3年生まで、児童265人。入寮費は年間 B500(¥1500、といっても彼等の親の農業収入は精々週 B250 のレベル)で、食事を供され、共同生活をしながら学校に通う。各自、身体を洗ったり、洗濯したり、身の回りを片付けたり、また年上から年下まで分担に応じて、当番で朝と晩に黙々と掃除をする。

山の朝晩はとても寒い。夜、皆で満天の星空を飽かず眺めていたが、東京から持ち歩いてきたスキーのヤッケが程良く、遂には寒さに焚き火を囲んだ。寄宿舎は男子と女子の生徒寮に分かれており、男のメンバーは、教師用の部屋に2晩宿泊した。

子供達は、朝6時に起床、直ぐ身支度を整え、ある者は毛布を被り、ある者はダブダブのジャンパーを羽織って、寝ぼけ眼で礼拝堂へ集まってくる。一番年長のお兄さんが、ギターで朝の歌や讃美の曲を弾き始めると、たちまち手を振り、身を振り、身体全部を使って、讃美を歌う。あの眠さやこの寒さはどうしてしまったのかと思う。思い切り元気で可愛く、腹の底から歌われる讃美は、久しく聞くことのなかった天使の声だ。次に来る時には、テープレコーダーを持ってきて、この歌声を日本へもち帰りたいとつくづく思った。

一泊した翌日は、今回大里牧師が是非メンバーを連れてゆきたいと希っておられた、ここから更に50km 山奥のカレン部落訪問である。2台の小型トラックに乗ってのトレッキングである。道はまさしく沢である。雨季の盛りの3ヶ月程、交通は遮断される。カーブの多い山道を、ある時は急降下し、川を車のままザブザブと横切り、また山を駆け上り、山間に小さな村が現れてさて目的地到着かと思うと、更に進み、そんな繰り返しの果てに漸く目的地クルッティー村に着いた。 50km、所要時間2時間。



(ティワタ村からクルッティー村への道)



(山頂の教会の礼拝に出席した家族たちと)

3年前にここに教会が建てられ、若いマラキ牧師の活動で130家族100世帯がキリスト者になっている。現在、セメントもペンキも不十分で、ドアも窓も出来ていないが、3月末にはチェンマイ地区の総会がここで開かれ、献堂式が行われる。

カレンの部落への宣教は、先ずトイレなど公衆衛生を整えることから始められ、こんな山奥にも、驚くことに水桶を置いたトイレがあった。

最近、チェンマイの旅行会社が山岳民族を訪ねるトレッキングのツアーを組むようになったのだが、興味本位の観光ツアーの身勝手に、教育を受けて啓蒙されたり、開墾をして定着農業をしたり、道路が通り、電気が通じ、水桶が備えられて整えられた生活環境を享受するようになった部落は観光価値が無いとしてパスするのだそうだ。彼等にとって、観光資源として開発されず未開のままに山岳民族を留めおきたいのである。

今回は、タイの東北から西北を横断する移動距離がかなり長い行程で、当初からメンバーの健康上の負担を懸念し、対応策を用意していたが、メンバーの全てが全行程を共に行動した。カレン族のどの部落を訪問するかについては大里牧師にお任せしていたが、まさに奥深い山奥で生活している山岳民族の中に、キリスト教がどのように定着しているかをスタディーチームに体験してもらいたい、そして彼等と交わってもらいたいという先生の考えから選ばれた村であった。

